

月刊 **みんぱく**
2018 4 月号

特集

障害で気づく、障害が築く



梅棹忠夫『夜はまだあけぬか』を読み直す 広瀬浩二郎／「国文祭・障文祭なら2017」の開催と体感展示の意義 大塚高史／障害者アートと2020年 真下弥生／娯楽のユニバーサル化 大石徹／視覚障害者を屋外へ 山本清龍／障害学生支援に向けた広島大学の挑戦 佐野(藤田)真理子／大学教育と学問の再検討・再創造 嶺重慎

パラリンピックを通じて 社会を変える

河合 純一

プロフィール
1975年静岡県生まれ。早稲田大学大学院
修士。パラリンピック競泳金メダリスト。中
学校教員を経て、現在、日本パラリンピ
ア協会会長、国立スポーツ科学センター先
任研究員、2020東京オリンピック・パラ
リンピック競技大会組織委員会アスリート委員
会副委員長など。自伝映画「夢追いかけて」が
2003年に公開。著書に「パラリンピックを
学ぶ」早稲田大学出版部など。

私は一九九二年のバルセロナから二〇一二年の

ロンドンまで六回のパラリンピックに競泳で出場して
きた。視覚障害クラス(S11・全盲、光覚)で五〇
メートル自由形での金メダルを含め、通算二一〇個のメ
ダルを獲得することができた(金五個、銀九個、銅七
個、日本人最多)。また、パラリンピアン仲間たちと

二〇〇三年に日本パラリンピアンズ協会を立ち上げ、
現在は会長をつとめている。こうした活動も考慮さ
れ二〇一六年に私はパラリンピック殿堂入りを果た
すことができた。日本人として初である。これは改
めて自分自身の活動を振り返るよい機会ともなった。

2020東京オリンピック・パラリンピックのビ
ジョンは「スポーツには世界と未来を変える力があ
る。」である。そのために、全員が自己ベスト、多様性
と調和、未来への継承という三つのコンセプトを掲げ
ている。そして、史上最もイノベティブでポジティ
ブな大会を作り出そうとしている。

開催まで二年、一〇〇〇日を切った。限られた時
間である。私たちに何ができるのだろうか。

私はパラリンピックには社会を変える力があると
信じている。それは選手として多くの大会に参加し
てきた実感でもある。世界で初めて、オリンピック・
パラリンピックを二回開催することとなった東京で
ある。この絶好の機会を生かし、世界のロールモデル

となるチャンスである。

二〇一二年のロンドンパラリンピックはもつとも成
功した大会とされている。多くの国々がイギリス、ロ
ンドンの取り組みを学んでいる。二〇二〇年以降は、
その地位に東京、日本がつくチャンスである。

「社会を変える」と大きなことを言っていると思われ
るかもしれない。どうすれば社会が変わるのかとい
えば、社会を構成している人々の心構えや考え方を
変えていくことに他ならない。一人から二人、二人か
ら三人へと広がっていくことにより、ある閾値を突破
することにより、社会が変わったといえるのだと考え
ている。そのために、私たちは子どもたちへの教育に
大いなる可能性を見出している。パラリンピックで
繰り広げられるパフォーマンスは人々に驚きや感動
をもたらす。その衝撃が新たな気づきとなり、変化
を促す。パラリンピックとはそういったコンテンツな
のだと思う。

しかしながら、オリンピックの参加国数は二〇〇を
超えるが、パラリンピックは一六〇ほどである。この
差を生み出している社会背景から、目をそらすことな
く、受け止めていかねばならない。あらゆる角度から
パラリンピックを見てほしい。そして、全身で感じて
ほしい。二〇二〇年八月二十五日〜九月六日までを楽
しみにしていただきたい。

月刊 みんなぱく

4月号目次

- | | | | |
|---|--|----|---|
| 1 | エッセイ 千字文
パラリンピックを通じて社会を変える
河合 純一 | 10 | 〇〇してみました世界のフィールド
フランスとマヌーシュ、
ふたつの現場での子育て
左地 亮子 |
| | 特集 障害で気づく、障害が築く | 12 | みんなぱく Information |
| 2 | 梅棹忠夫『夜はまだあけぬか』を読み直す
——障害研究と文化相対主義
広瀬 浩二郎 | 14 | 想像界の生物相
天狗の鼻
久留島 元 |
| 4 | 「国文祭・障文祭なら2017」の開催と
体感展示の意義／大塚 高史 | 16 | 新世紀ミュージアム
ネパール音楽博物館
寺田 吉孝 |
| 5 | 障害者アートと2020年／真下 弥生 | 18 | シネ倶楽部 M
単調な構図が生む豊潤な沃野
——「マナカマナ——雲上の巡礼」
南 真木人 |
| 6 | 娯楽のユニバーサル化——映画の副音声／大石 徹 | 20 | ながなんちゃ
祖母はよそ者？
河合 洋尚 |
| 7 | 視覚障害者を屋外へ
——観光のユニバーサル化を目指す研究／山本 清龍 | 21 | 次号予告・編集後記 |
| 8 | 障害学生支援に向けた広島大学の挑戦
佐野(藤田) 真理子 | | |
| 9 | 大学教育と学問の再検討・再創造／嶺重 慎 | | |

障害で気づく、 障害が築く

わたしたちはさまざまな人びととともに、ときには異文化と接触しながら生きています。よりよい社会を築くためには、人間の多様性に気づくことが重要だが、障害もまた避けてはおれないテーマのひとつである。本特集では障害という視点から各分野を見渡して、多様な「ウェイ・オブ・ライフ」(生き方)を考える。

梅棹忠夫『夜はまだあけぬか』を読み直す ——障害研究と文化相対主義

ひろせ こうじろう
民博グローバル現象研究部
広瀬浩二郎

二人の研究者の「生き方」(行き方)を比較する。民博の初代館長・梅棹忠夫は六五歳のときに失明し、その後の二五年を視覚障害とともに生きた。彼の失明後の心境は、『夜はまだあけぬか』に克明に記述されている。梅棹にとって視覚障害とはどんな意味をもっていたのだろうか。梅棹は失明前の六〇年余を「見常者」(視覚に依拠する生活を送る人)として暮らした。世界中を旅し、多くの事物を見て、独創的な著書・論文を発表してきた梅棹にとって、視覚は人一倍重要な感覚であったのは間違いない。その視覚が失明により「使えなくなつたのである。

彼の失明に対する思いは、「夜はまだあけぬか」ということばに端的に要約されている。つまり、彼にとって視覚障害とは「あけぬ夜」だった。晩年の梅棹は、いつかかならず夜はあけると信じて生きたともいえる。梅棹が「あけぬ夜」という運命・苦境を甘受し、失明後も旺盛な著作活動に取り組んだことは尊敬に値する。しかし、やや厳しい評価をするならば、失明後の梅棹の著作は、見常者だつたころの思索・体験をまとめたものである。戦後日本を代表する知の巨人といわれる梅棹忠夫にとつても、六五歳という高齢での失明は、「今までできていたことができなくなる」(マイナス)

外の何物でもなかった。残念ながら、彼が視覚障害者ならではの知的生産の技術を開拓することはなかったのである。もしも梅棹が四十代、五十代で失明していたら、点字の触読もマスターしたであろう。さらに、視覚障害者のライフスタイル、文化について、さまざまな提言もしていたに違いない。その意味で、僕は梅棹を「遅すぎた失明者」と称している。梅棹の著書と拙著を並べるのはおこがましいが、昨年一月に『目に見えない世界を歩く』が出版された。本書は僕の半生、これまでの研究成果を紹介する一般向けの新書である。僕の視覚障害に

対する認識は、梅棹とは異なる。一三歳で失明した僕は、その後の三〇年余を視覚障害者として生きてきた。一三歳の段階で、「今までできていたことができなくなる」と絶望しては、僕の人生は終わってしまう。



1993年3月、梅棹館長退官記念講演会にて(左は佐々木高明氏)

中学から通い始めた盲学校では、点字の教科書を読まなければ勉強ができない。盲学校で僕は、「触常者」(触覚に依拠する生活を送る人)として生きる知恵を身につけた。拙著では、マジヨリテイとは一味違う「ウェイ・オブ・ライフ」(生き方)を探し、「あけぬ夜」を歓迎するに至る僕の歩みを素直に記述している。近年のICTの進展、障害を取り巻く環境の変化が、視覚を「使わない」人生、研究の可能性を模索する僕にとってプラスに働いているのも確かだろう。

障害研究の夜明け
『夜はまだあけぬか』『目に見えない世界を歩く』は、いずれも視覚障害を異文化ととらえ、失明し

た研究者の異文化体験、フィールドワークを記録する点で共通している。梅棹は見常者の視点で「あけぬ夜」と対峙した。一方、僕は触常者というマイノリティの立ち位置から、見常者中心の社会にメッセージを届けることを試みた。梅棹のフィールドワークが「健常者」(見常者)のスタンスだとすれば、僕は「障害者」(触常者)という発想にこだわったともいえる。両書を読み比べれば、視覚障害という現象を研究対象と位置づけ、「あけぬ夜」を実地調査する方法を知ることができるだろう。

文化相対主義は、今日の文化人類学を支える基本理念である。レヴィ・ストロースは一九六二年刊行の『野生の思考』において、文明人の思考と本質的に異なる未開の思考が存在するという幻想を解体した。野生の思考とは、いわゆる未開人、原始人固有の思考ではない。野生の思考が文明人の科学的思考と共存、相互補完していることを実証し、その復権を主張したのがレヴィ・ストロースの最大



1977年10月、民博を訪れたレヴィ・ストロース夫妻(左手前は梅棹館長)

の功績である。レヴィ・ストロースは一九三〇年代のブラジルで西欧人による自然破壊、産業化が伝統文化を蝕んでいく悲劇を実見し、有名な『悲しき熱帯』を著した。この古典的名著の刊行から約六〇年。人類学の文化相対主義は、世界各地の研究者たちのフィールドワークの蓄積により鍛えられてきた。だが、異文化を研究対象とする人類学にあつても、障害が積極的に取り上げられることはほとんどなかったのではないか。『悲しき熱帯』でも、障害とは単なる害悪、不幸であるという表面的な理解にとどまっている。

ここで、仮に文明人を健常者、未開人を障害者に置き換えてみると、論点が明確となる。文化人類学が真の意味で多様性に気づき、多様性を築く学として成熟し、現代社会に貢献するためには、障害は避けておれない必須テーマなのではなからうか。一昨年の障害者差別解消法施行後、各方面で障害者に関する「合理的配慮」のあり方が検討されている。合理的配慮は障害者たちを「悲しき熱帯」へ追い込むのではなく、彼らの「野生の思考」を維持・拡張するものでなければならぬ。僕は梅棹忠夫の『夜はまだあけぬか』の「夜」を障害の学問研究、社会認識と解釈してみたい。本特集で展開される各論が示すように、この「夜」に対する果敢な挑戦、障害者の「野生の思考」を引き出す実践はすでに始まっている。梅棹先生、「夜」はもうすぐあけますよ、きつと!

「国文祭・障文祭なら2017」の開催と 体感展示の意義

おつかたかし 奈良県庁
大塚 高史

何も見えないなかを、手探りで進む。空間に満ちる自然のにおい。響き渡る猛獣の声。全身の感覚を研ぎ澄ませながら、恐る恐る金網のなかに手を入れると、そこには毛むくじらの大きな体が……。 「体感する奈良!」心「感覚展」の目玉企画「心」感覚動物園」での一幕である。

全国初の一体開催

本展覧会は、第十七回全国障害者芸術・文化祭なら大会のイベントのひとつとして、二〇一七年九月から一〇月にかけて、奈良県内の南部と北部の二カ所の会場（大淀町文化会館および奈良県文化会館）を巡回して開催された。

奈良県では、二〇一七年九月一日から一月三〇日までの三カ月間、「第三十二回国民文化祭・なら2017」および「第十七回全国障害者芸術・文化祭なら大会」が開催され、県内の全市町村で



徳勝龍関(奈良県出身)の等身大手型

一〇〇を超えるイベントが開催されたところであるが、今回のなら大会の最大の特徴は、両祭典を全国で初めて一体開催したことである。 一体開催のこころは、障害のある人もない人もともに楽しめる芸術・文化イベントを多数開催することで、両者の交流の場を増やし、絆を強めることにある。

「体感する奈良!」心「感覚展」は、まさにその趣旨を体現すべく、誰もが楽しめる体感型の展覧会として企画された。視覚に頼らず、触覚、聴覚、嗅覚などの全身の感覚で奈良の魅力を体感でき、視覚等に障害のある人はもちろん、障害のない人にも新鮮な鑑賞方法を提案できるものを目指した。 アドバイザーには、ユニバーサル展示研究の第一人者である広瀬浩二郎氏をお迎えし、企画から展示まで全面的に協力をいただいた。

「体感する奈良!」心「感覚展」の概要

展覧会の構成は次のとおりである。

- ① 「心」感覚動物園
- ② 「体感する奈良!」ゾーン
 - ・ 「文化」体感エリア
 - ・ 「自然」体感エリア
 - ・ 「歴史」体感エリア
 - ・ 「芸術」体感エリア

障害者アートと二〇二〇年

「障害者アート」の主流化が、かつてない勢いで進められている。障害をもつ人たちが制作した絵画やオブジェが、美術館やファッションビルで展示され、アート誌で特集される機会がここ数年で格段に増えた。「福祉ではない見方で」というフレーズも散見される。

オリンピックは「オリンピック精神」の普及を目的に、スポーツのみならず、文化、芸術もその一翼を担うものとされている。パラリンピックとの連続開催、組織委員会の統一が進行するにつれ、文化プログラムでの障害者の可視化も進行した。二〇二〇年に開催される東京大会もその波に乗るべく、二〇一七年に改正された文化芸術基本法には、障害をもつ人たちの文化環境整備、創作活動への支援が明記された。



ソウに触った印象を造形する視覚障害児。韓国のワークショップ(写真提供: Another Way of Seeing, 2011年)

当事者不在の評価

日本における「障害者アート」は——昨今は「アール・ブリュット」の呼称が浸透しつつあるようだが——、知的障害をもつ人びとの手になるものが中心である。その評価が進む一方、当事者不在のまま、議論や作品評価がなされがちな傾向も否めない。

そして、こうしたポジティブ・キャンペーンは、障害者をめぐる根深い負の側面、例えば二〇一六年に神奈川県相模原市の障害者入所施設で起こった殺傷事件、旧優生保護法下の墮胎・障害者への不妊手術、新型出生前診断といった、その障害を理由に存在を否定され、人格を傷つけられてきた現実について触れることはない。もちろん、障害者の生活が常に悲惨だということではなく、むしろ「アート」は、そのようなまなざしに風穴を開け、解放する力をもっているのだが、外在的な力が推進する祝祭は、いまだ乗り越えられていない理不尽の存在を覆い隠す危うさをはらんでいる。

アートの作られ方

アートの役目は問題告発ではない、もつと違うところにあるのだということもできるだろう。しかし、自覚するとせざるにかかわらず、美術の制度や作品主義的アプローチは、作品と作家を力

来場者には、最初に、アイマスクを着用した状態で視覚を使わずに楽しむ「心」感覚動物園」で全身の感覚をよび覚ましてから、四つの切り口で奈良の魅力を味わつてもらおうという流れである。 紙幅の都合上、展示物の詳細は割愛させていたが、「奈良の音」を聴けるコーナー、さまざまな動物の毛で作られた「奈良筆」を試し書きして比べられるコーナー、手に塗るお香「塗香」の香りを楽しめるコーナーなど、全身でバランスよく楽しんでもらえるよう工夫した。

また、点字キャプションの併設はもちろん、弱視者に配慮した黒地に白文字のキャプションの採用、誘導カーペットと点字タイルによる会場内の順路表示など、誰もが鑑賞しやすい環境の整備にも努めた。

「体感展示」の可能性

視覚に頼らない展示・鑑賞の方法は、まだまだ確立されていない実験的な領域である。今回の展覧会も、まさに「手探り」の状態で開催したものであり、企画、展示、運営、集客の各面で課題が多い。

しかし、来場者からは、たくさんの感動の声やさらなる期待の声をいただいた。「見ない」ことで初めて気づくこと、広がる世界が確かにあると感じる。鑑賞者の多様性を尊重し、普遍性を追求する「体感展示」のさらなる普及・発展を願うとともに、日本文化の始まりの地ともいわれる奈良での取組がその一助となれば幸いである。

づけるよりも、現行の大きな流れに加担してはいないだろうか。国内外の障害者運動は、障害者自身の声を過小評価して力を奪う、専門家・支援者による支配の構造を指摘し、批判してきた。はたして美術はその轍を踏んではないだろうか。美術の枠組みを上位に前提したアプローチは、障害者自身が積み上げてきた経験から学ぶ姿勢があるだろうか。

文化とは、大きな力に保護されて発展するだけのものでなく、自発的に、いかんともしがたく生まれるものでもある。自分の抛つて立つ足元を揺さぶられることもあれば、触れられたくない何かを突いてくることもある。「障害者アート」もまた、安全で了解可能な表現として回収されるのではなく、期待を裏切り、支配を巧みに逃れるしたたかさが息づいているはずだ。



海風にたなびくカラフルな布。クック諸島の知的障害者アトリエにて(2017年)

娯楽のユニバーサル化

——映画の副音声

おおいとむら
大石 徹
芦屋大学教授

副音声は、映像の主音声を聴くだけではわかりにくい情報を視覚障害者に伝えるものだ。台詞を妨げずに、人物の行動や表情、服装、場面の様子や転換などを伝える。「音声ガイド」や「音声解説」ともよばれる。

日本で最初に副音声を導入したのは日本テレビの二時間ドラマ・シリーズ「火曜サスペンス劇場」だった。テレビのステレオ放送や二カ国語放送が始まってまもない一九八三年のことである。やがて副音声は映画祭やDVDでも付けられるように



社会福祉法人 日本ライトハウスにて副音声の編集者(左)とナレーター(右) (2018年)

なる。二〇一七年には映画の副音声テーマの映画『光』(河瀬直美監督)が公開された。

副音声の媒体

現在、映画の副音声を聴く媒体としては、副音声付きのDVDとブルーレイ、リアフリー上映会、ユニバーサル・シアター、シネマ・デイズ、UDCastがある。

リアフリー上映会は、副音声と聴覚障害者向け字幕が付いた作品の上映会のことを指す。リアフリー上映の常設館、すなわちユニバーサル・シアターとしては、シネマ・チュプキ・タバタが二〇一六年に東京都北区でオープンした。

シネマ・デイズは、映画の主音声と副音声、つまり音声のみをデジタル録音図書で聴くしくみである。デ

イジー(DAISY)は「アクセシブルなデジタル情報システム(Digital Accessible Information System)」の略で、視覚障害者向けデジタル録音図書のデータ形式の名称だ。



シネマ・デイズのためのCDと再生機

UDCastは、スマートフォンやタブレットの無料アプリで聴く副音声のことで、映画館でもDVDやブルーレイでも利用できる。UDは「ユニバーサル・デザイン(Universal Design)」の略で、アプリが端末に情報を「投げる(Cast)」ということからUDCastとよばれる。

作成の手順

どの媒体の副音声も、同じような手順で一〜六カ月かけて作られる。作成には三つの役割(台本執筆、ナレーター、編集者)があり、一人が複数の役割を担うことも多い。最初に着手されるのは副音声用の台本だ。書かれた台本は数名で検討される。検討済みの台本に沿ってナレーターが副音声を吹き込み、それを編集者が映画内に差し込む。編集後の副音声については、モニター会で意見が交わされる。モニター会には数名の視覚障害者も参加し、会での意見を受けて、台本が修正され、副音声も再録音・再編集される。この修正版が最終チェックで合格すれば完成だ。

最後に副音声の作成と人類学との共通点を述べたい。副音声作成者は、選択した映像情報を解釈しながらことばに翻訳している。人類学者は異文化の情報を選択し、それを解釈しながら、自分の属する文化のことばに翻訳している。この、選択した情報を解釈しながら翻訳するという行為が共通しているといえよう。筆者が副音声に関心をもった理由もそこにある。

視覚障害者を屋外へ

——観光のユニバーサル化を目指す研究

近年、観光や野外体験の分野では訪問地域の生活、文化に関心が寄せられ、五感を用いた体験、学習のプログラムの開発が進展している。本物、本質への志向、視覚と聴覚という従来の上級感覚への依存からの脱却ととらえることができ、相対的に依存度を低下させた感覚の活用という観点から歓迎すべき状況がある。しかし、触るとは何か、どのように触ると効果的なのか、こうした基本的な問いに答えるための研究の蓄積は限られており、人の感覚、感性について解き明かす実践的研究が必要と思われる。



茶葉を触って嗅ぐ(2013年)

また、視覚障害者を屋外へ案内するにあたっては、安全管理は何よりも重要な論点であろう。駅のホームで誤って転落し亡くなったという痛ましい事故も繰り返し起きている。それゆえ、危険の多い野外に連れ出そうとすることに正当性や意義はあるのか、そのあたりの議論も必要である。

障害者のニーズを知る

かつて、ユニバーサル・ミュージアム研究会(民博の共同研究プロジェクト)のメンバー、視覚障害者が一緒に大坂谷町六丁目駅の南側一帯、空堀通りを歩いたことがある(表紙写真)。商店街の活気を感じながら坂を歩き、とにかく聞いて、触って、嗅いで歩いた。結果的には、視覚障害者にとっては坂道を登る、鯉節を削る、水琴窟の音を聞く、煉瓦、石垣に触るといった体験が強い印象として残っていたが、感想には驚くべきコメントがあった。そこには、長屋の生活を見てみたい、一人で歩いてみたい、という記述(点字)があったのである。視覚障害者は家から出たがらないのではないかという筆者の勝手な想像もあり、障害者が事故に遭わないためのリスクマネジメントにばかり関心が向かっていたが、どうやら、外界をもっと深く知りたいという欲求がある。可能な限りリスクを排除しながら、外界を知る機会を提供

やまもと きよまつ
山本 清龍
東京大学大学院准教授



ツリークライミングの体験講習会
(右側が広瀬氏、2012年)

する方法論の提案が必要と思われたのである。研究会とご縁は、愛媛大学農学部附属演習林で開催されたツリークライミング体験講習会に、無謀にも、全員の研究者として知られていた広瀬浩二郎氏をイベントに招待し、木登りしてもらったことに始まる(右写真)。ロープに足をかけ垂直方向下に体重をかける必要があり、難しい体験に違いなかつたが、途中まで登って空中で気持ち良さそうに揺れる広瀬氏の光景は今でも忘れられない。

観光学の未来

視覚障害者と一緒になると気づかされることが多い。目の前のものを把握する際の輪郭探索など独特の触察の方法(上写真)もそうであるが、傘に当たる雨滴の音が煩わしいといった感想も参考になる。見えない世界にいる視覚障害者の気づきは、晴眼者に対しても身の回りの空間の楽しみ方、これら観光のユニバーサル化という研究の重要な動機となっている。

障害学生支援に向けた広島大学の挑戦

佐野(藤田)眞理子

広島大学教授
広島大学アクセシビリティセンター長

平成二八年四月一日から、障害者差別解消法が施行され、高等教育機関においても合理的配慮の提供が義務化された。障害学生への合理的配慮の取組みにおける課題と対応について、広島大学の支援を例として、考えてみたい。

課題① 支援・相談体制の充実

障害学生支援をおこなうには、基本方針、規則、組織、支援の流れを整備し、全学的な支援体制を



ALP研修合宿:グループ作業(6大学参加、撮影:アクセシビリティセンター、2016年)

構築することが重要である。同じ障害でもニーズは、個人、個人で異なる。また、授業の特性、形態、難易度、教材の種類も考慮に入れる必要がある。本学では、学生が所属する学部・研究科が、障害学生の修学支援について主たる責任をもつ。支援の拠点として、アクセシビリティセンターが設置され、支援を実施する部局に対して、配慮・調整・支援に関する助言、支援機器の貸出し、アクセシビリティ教育と支援者の育成・派遣をおこなっている。センター長の他、専任教員、コーディネーターと学生スタッフが勤務している。障害特性に応じた支援方法を提案・助言支援できる部署と、教育(カリキュラム・単位認定・卒業判定)をつかさどる部署(学部・研究科)が連携して、学生本人との建設的な対話によって合理的配慮の内容を決めている。

課題② リーダーの育成

多様性を理解し、修学・就労・生活環境におけるアクセシビリティ(参加しやすさ、利用しやすさ、学びやすさ)を推進できる人材が必要である。本学では、教育と支援の融合を目指して、「教育課程【資格認定】」「研修合宿」「インターンシップ」で構成される、新しい形の人材育成・活用プログラム、アクセシビリティリーダー育成プログラム(A L P)を展開している。A L Pは、本学で平

成一八八年に開始したが、その後、産学官連携のアクセシビリティリーダー育成協議会を創設した。平成二九年度には、一五大学三企業二行政機関が参加・協力している。

課題③ 持続可能な協働支援体制に向けて

近年、高等教育における障害学生の支援ニーズは、多様化・高度化する一方で、支援のための財政的資源は、減少の方向にある。大学毎に閉じた支援をおこなうには限界があり、



UE-Net: インターネットを介した他大学への要約筆記支援(撮影:アクセシビリティセンター、2017年)

地域や専門機関・企業との連携は必須である。中国地方五大学を設立メンバーとして、UENP(Universal design in Education Network)を構築し、教育のユニバーサルデザイン化、アクセシビリティ推進に関する知的・物的・人的資源の共有と育成を図る取組みを実施している。今後、大学のみならず、小・中・高等学校、地域の専門支援機関、企業との連携を拡大していく。

大学教育と学問の再検討・再創造

嶺重慎 京都大学教授

ある投書から

「私は体の弱い十六歳の女の子です。学校でクラブに入っていますが、先輩たちが聞こえよがしに体の弱いやつは、いるだけで迷惑だ」といいます。でも私は思うんです。人間、価値があるから生きているんじゃないかと、生きているから価値があるんだと」
(渡辺和子『面倒だから、しよう』の引用から)

この少女の問いかけは重い。それは、「価値」という「普遍的」概念が先行し、「生きる」という個々にとって切実な課題が後回しにされている社会への鋭い警鐘だ。

この少女の問いかけに、大学の学問は答えきれているだろうか。伝統的に大学での学問は「普遍性」を大事にしてきた。普遍性が無ければ学問体系の根幹がゆらぐ。そう信じて大学では、大学人でしか理解できないことばで自分たちしか通用しない議論をしている。その姿勢が、社会一般の意識・感覚とのずれを生み出していることはないだろうか。

京都大学バリアフリーシンポジウム

二〇一七年九月、「京都大学バリアフリーシン



複雑な雲の形。これも複雑系。この形を科学するのは難しい(2018年1月)

物理学の目標が、統一の原理の探究から、多様性発現の論理の追究へと移りつつあることに留意すべきだろう。(中略) 初心に戻って

ポジウム2017」が開かれ、広瀬浩二郎氏とわたしも企画に携わった。テーマは「障害」で学びを拡げる」。健常者(マジョリティ)が考える「普遍性」を基盤に発展してきた学問を、「障害」という観点から見直し、あらたな展開を目指そうという趣旨の会合である。限られた世界でしか通用しない普遍性から多様性を包含した真の普遍性へ。今、障害者が発信する新しい学問のスタイルが形になりつつある。

原理・原則という名の普遍性を基に発展した学問というと、真つ先に物理学があげられるだろう。しかしそこに限界が見えてきたと指摘されて久しい。「人々の自然観の基礎的概念を打ち立てるべき物理学の目標が、統一の原理の探究から、多様性発現の論理の追究へと移りつつあることに留意すべきだろう。(中略) 初心に戻って

差違をそのまま受け取り、記述し、その根源を探る方向へと転回する時代にさしかかっている」(池内『転回の時代に——科学のいまを考える』)。デカルトを祖とする要素還元主義という原理・原則論は、科学の進展に大いに貢献してきた。でもそれは「要素還元できないもの」を排除した発展ではなかったか? 要素還元できないもの、それは例えばカオスやフラクタルなど複雑系とよばれる現象(写真)であり、また科学と社会との関係である。このような問題意識に鑑み、シンポジウムでは以下の話題をとりあげ、現在書籍にまとめているところだ。まず宇宙空間やロボットなど、従来の「常識」や「普遍性」が通用しない学問世界の動向を紹介する。次に「障害学」という障害当事者が生み出した学問について成果と課題をまとめ、経済学や倫理学などの既存の学問分野に「障害」をとり入れた結果生じつつある発展の具体例を示す。最後に障害当事者による、前例のまったくない研究を紹介する。本特集(二〜三頁)に掲載の広瀬氏の論考はその一例である。

原理・原則論が力を失ったというのではない。それと相補的な別の指導原理が必要というのだ。キーワードは「多様性」。決して「雑多」を意味する「多様性」ではない。多様な個のあいだに働く相互作用が新しい物質観・自然観・社会観を与え、真の普遍的価値を生み出すという考え方は、今後あらゆる学問分野に拡がっていくだろう。

フランスとマヌーシュ、ふたつの現場での子育て

左地 亮子
東洋大学准教授



子育てして(まかせて?)みました
マヌーシュのキャラヴァン居住地では犬や鶏や豚などと遊ぶこともできた(2008年)

学校の後に学習塾、これは現代日本では頻繁に見られる教育のかたちだが、子どもの教育は親の考え方だけでなく、国の方針、社会の傾向、所属する集団の文化からも影響を受ける。今号は移民大国フランスと、そこに住む移動民マヌーシュの教育について紹介する。

「ワーク・ライフ・バランス」ということばが普及した近年、研究者のあいだでも、ライフイベントと研究の両立をめぐる議論がかわさっている。特に、長期間フィールドワークをおこなう人類学の場合、研究者が若手や女性であると、研究の重要な時期に結婚・妊娠・出産・育児のタイムミングが重なることがあり、この問題は避けておれない。わたしの場合は、フランスでの二年間の大学院留学・フィールドワークと育児期が重なった。研究と育児を両立する方法に唯一の正解は存在しない。研究・調査地や家庭の事情、子どもの個性によってさまざまな方法がありうるだろうが、わたしにとってこのふたつの仕事はフランスとマヌーシュという調査地、調査対象のおかげで幸運なかたちで結びついた。



カーニバル(謝肉祭)での仮装行進。魔女に扮した幼稚園の先生に率いられた羊たち(2009年)

フランスの幼稚園

フランスでも「保活」に苦労する親はいるが、保育園クラッセンユの重要性は日本よりも薄い。なぜなら、子どもは二歳半くらいから無償の公立幼稚園エコールマテルネル(保育学校)に通うことができるからだ。日本で保育園に預けていたわたしの娘も、この教育制度の恩恵を受けた。知人が地元幼稚園の園長に電話を入れてくれ、そして入園前日に娘のパスポートとワクチン証明を持参して園長と面談する、ただそれだけで外国人の娘の入園が許可されたことには驚かされた。フランスに住む子どもであれば、滞在許可書もフ

ランス語基礎能力も必要ない。移民大国フランスでは、社会統合の観点から小学校入学以前のフランス語初期教育が重視されており、義務ではないものの、大半の子どもが幼稚園に通う。給食と午睡をばさんで朝から夕方まで子どもを学ばせてくれる幼稚園の厚い教育制度、そして園の教職員と仲間のおかげで、娘の日々の生活は充実したものとなった。また地域の人びとに支えられ、母子二人でありながら孤独を感じることもなく、わたしのフランスでの育児は日本にいたときよりも手がかららず、研究との両立はほとんど問題にならなかった。

マヌーシュの「教育」

さらに、娘はフランス社会に浸りながらも、わたしが調査対象とするマヌーシュ(フランスのジプシーの「集団」)の居住地で彼ら独自の「教育」を享受することもできた。

マヌーシュの子どもは、多くの場合、小学校から中学校まで現地の公立学校に通う。一般家庭とは異なり、親元から離れる、読み書きを学ぶのには「まだ早すぎる」として、幼稚園に子どもを通わせる親は少数派である。依然識字率は低いが、それでも、中高年世代では小

学校にすらほぼ通わなかったという人が多いので、就学率は上昇してきたといえる。

人類学は「教育」の概念や方法の多様性を報告してきたが、マヌーシュにも独自の「教育」とよべるものがある。まずそれは、大人の仕事を覚えてまねさせることである。一〇歳にも満たない女の子が赤ん坊の世話をする、男の子が鉄くず



読み書きをしっかりと学んだ幼稚園(2009年)

の選別分解作業を一通りこなすなど、わたしの目から見ると危なっかしいのだが、親たちは「マヌーシュの子どもとはそういうもの、幼いうちから仕事ができるようになるのだ」と誇らしそうに見守る。そして、大人たちは数々のキスで子どもを褒め、いかにその子が素晴らしいのかを口に出して伝える。学習レベルや被差別体験などから学校になじめないマヌーシュの子どもは多いが、彼らがいっつも自尊心をもち堂々としていられるのは、こうしたマヌーシュ流「教育」の効果かもしれない。

大人が子どもの欲求・要求をすべて受容するマヌーシュ流子育ては、幼いうちから自立・自律や社会の規則を習得させる傾向のあるフランスの一般の人びとから、大人に従わずやりたい放題の「王様子ども」を育てると批判されることがある。しかしわたしは、娘がおなかをすかせていないか、さびしい思いをしていないかと常に心をくばり、日本の祖母のように彼女をおおいに甘やかし、そしていつも力強く抱きしめてくれたマヌーシュたち、幼稚園とは異なる方法で彼らが与えてくれた「教育」に感謝している。



マヌーシュの小屋でチョコレートに囲まれて復活祭を祝う(2009年)

フランス



開館40周年記念特別展

「太陽の塔からみんなくへ」
70年万博収集資料

1968年から1969年にかけて「日本万国博覧会世界民族資料調査収集団」が世界の諸民族の仮面、彫像、生活用具を収集しました。収集活動にかかわる書簡や写真とあわせてコレクションの生い立ちを紹介いたします。これらの資料は、70年大阪万博で太陽の塔(テーマ館)の地下に展示され、現在みんなくの貴重なコレクションとなっております。

会期 5月29日(火)まで
会場 特別展示館



祖先像
(ニューヘブリデス諸島、現バヌアツ)

みんなくセミナー

日時 4月21日(土)13時30分～15時(13時開場)

会場 本館講堂

定員 450名(当日先着順)

参加費 無料(展示をご覧になる方は展示観覧券が必要です)

第479回

「EEMとく」運動

松原正毅(本館 名誉教授)

野林厚志(本館 教授)

丹羽典生(本館 准教授)

EEM(Expo '70 Ethnological Mission「日本万国博覧会世界民族資料調査収集団」)の収集の様子や当時の裏話を、EEMの主要なメンバーであった松原正毅名誉教授をお迎えして、皆様と楽しみたいと思います。



当時の航空券やパスポート

みんなくウィークエンド・サロン
研究者(話者)

本館の研究者が「現在取り組んでいる研究」調査している地域(国)の最新情報「みんなく」の展示資料」について分かりやすくお話しします。

4月1日(日)14時30分～15時 特別展示館

「田の神タノコナサ」について

話者 日高真吾(本館 准教授)

EEMフォーラム
「未来へ集まる、未来へ送る」

自分のところに浮かんだ仮面を描いて、みんなくで21世紀の「仮面展示」を完成させましょう。仮面に万博の思い出や未来へのメッセージを書き込んでいただけます。

日時 特別展会期中

会場 特別展示館2階特設コーナー

※申込不要、参加無料(要展示観覧券)

関連イベント

ギャラリートーク

会場 特別展示館

日時 4月7日(土)11時～11時30分
講師 日高真吾(本館 准教授)

日時 4月14日(土)11時～11時30分
講師 丹羽典生(本館 准教授)

日時 4月21日(土)11時～11時30分
講師 卯田宗平(本館 准教授)

日時 4月28日(土)11時～11時30分
講師 吉岡乾(本館 助教)

※申込不要、参加無料(要展示観覧券)

みんなくミュージアムパートナーズ

ワークショップ

「かめんを作って変身しよう!」

みんなくには、世界中の珍しい仮面、面白い仮面がたくさんあります。それらをじつと見ていると、何か不思議な力がわいてきますよ。そして自分の願い事、あこがれなど好きな事を想像し、自分だけの仮面を作ってみませんか。

日時 4月15日(日)11時～12時10分

②13時～14時10分各回70分

会場 本館エントランスホール

定員 各回8名(先着順)

対象 5歳以上(未就学児は保護者同伴)

※申込不要、参加無料(要展示観覧券)

企画展

「アーミッシュキルトを訪ねて—そこに暮らし、そして世界に生きる人びと」

無地の服を着て馬車を駆る北米のキリスト教再洗礼派アーミッシュが布の端切れを生かしてつくるキルトは、その鮮やかな色合いや細やかなステッチで人びとを惹きつけています。2011年より収集してきたみんなくコレクションを素材として、キルトに織りこまれた日々の暮らしや物語、キルトが結ぶ世界との交流をたどりまします。会期 6月21日(木)～9月18日(火) 会場 本館企画展示場



裁縫セット

みんなく春の遠足・校外学習
事前見学&ガイダンス

春の遠足・校外学習にむけて、事前見学に来館される学校団体の先生方を対象としたガイダンスを開催します。

日時 4月5日(木)、6日(金)

14時～16時30分

会場 本館第5セミナー室ほか

※参加無料

ホームページから参加申込書をダウンロードし、必要事項を記入の上、FAXにてお送りください。

お申し込み・お問い合わせ先

国立民族学博物館案内所

電話 06・6878・8341

(10時～17時)

Fax 06・6878・8441

友の会

友の会講演会

会員無料(会員証提示)、一般500円

友の会講演会(大阪)

会場 本館第5セミナー室(定員96名・当日先着順)

第477回

富士山—水と世界遺産を考える

日時 5月5日(土)祝13時30分～14時40分

講師 秋道智彌(山梨県立富士山世界遺産センター所長)

本館 名誉教授

富士山は2013年6月22日、第37回世界遺産委員会において「富士山—信仰の対象と芸術の源泉」としてユネスコの世界遺産に登録決定されました。世界遺産の構成遺産は25あり、このうち富士五湖、忍野八海、白糸の滝、富士山本宮浅間神社など、水と関わりのあるサイトは半数以上に達します。富士山に降った雨や雪は地下に浸透し、湧水として湧き出します。富士山の水と生活や文化、信仰との関わりを振り返り、世界遺産としての意味を考えます。

第478回

カファイル:カラ遺跡とゾロアスター教

発掘調査で出土した木彫り板絵から読み解く

日時 6月2日(土)13時30分～14時40分

講師 寺村裕史(本館 准教授)

東京講演会

第122回

のこされたミッション

—EEM(万博資料収集団)からみんなくへ

日時 4月14日(土)13時30分～14時40分

会場 モンヘル御徒町店4Fサロン(定員60名、要事前申込)

講師 野林厚志(本館 教授)

1970年に大阪で開催された日本万国博覧会。テーマ館であった太陽の塔の地下には、世界各地の民族資料が展示されていました。その資料の収集に当たったのが若い人類学者で構成された「日本万国博覧会世界民族資料調査収集団(EEM)」です。彼らの収集活動から国立民族学博物館の創設にいたる経緯を、当時の記録をもとに紹介します。

※いずれも講演会終了後、講師を囲んで懇談会(40分)をおこないます。

第91回民族学研修の旅

モンゴル、遊牧の民に出会う—揺籃の地オルホン川

上流域と草原都市ウランバートルを訪ねる

8月8日(水)～15日(水) 8日間

みんなくフェア開催

開催中の特別展「太陽の塔からみんなくへ」

—70年万博収集資料」にまつわるミニ展

示などを実施します。

会期 4月30日(月)・振休まで

会場 エキスポシティ内のインフォレスト

すいた

●みんなく無料シャトルバスのご案内

大阪モノレール「万博記念公園駅」とみんなく

の間の直通送迎バスを特別展「太陽の塔

からみんなくへ」70年万博収集資料」の

会期中に運行します。

運行日 5月29日(火)までの土曜・日曜・祝日

1日11往復、所要時間10分、無料

運休日 平日、4月21日(土)、22日(日)、

28日(土)、29日(日)・祝、

30日(月)・振休

※万博記念公園でイベントが開催される場

合は臨時に運休することがあります。詳

細は本館ホームページをご覧ください。

時	万博記念公園駅	→国立民族学博物館
10	06	36
11	06	36
12		46
13	16	46
14	26	56
15	26	56
16		
17		

時	国立民族学博物館	→万博記念公園駅
10		50
11		20
12		30
13	00	30
14	10	40
15	10	40
16		30
17	00	



資料名 | 護符 (甲馬紙)
 標本番号 | H0208376
 地域 | 中国、雲南省
 サイズ | 縦 16cm × 横 12cm

想像界の生物相

天狗の鼻

日本学術振興会特別研究員 PD
 (京都精華大学)

くるしま はじめ
 久留島 元



資料名 | 絵馬 (天狗面図)
 標本番号 | H0015280
 地域 | 日本
 サイズ | 縦 21cm × 横 24cm



資料名 | 仮面 (天狗)
 標本番号 | H0012060
 地域 | 日本
 サイズ | 高さ 15cm × 幅 11cm × 厚さ 7.9cm

◆◆◆天狗の鼻は「高い」のか◆◆◆

ヤマザキマリの漫画『テルマエ・ロマエ』

は、古代ローマの浴場設計者が、なぜか現代日本(の風呂場)にタイムスリップする荒唐無稽な展開が人気を博した。映画版では、阿部寛、北村一輝ら彫りの深い日本人俳優が古代ローマ人を演じたことも話題になった。作中、まさかタイムスリップしたとは知らない主人公は、出会った日本人をローマに従属する民族だろうと考え、「平たい顔族」と名付ける。たしかに日本人は「平たい顔族」だ。

われわれ「平たい顔族」にとつて、大きく高い鼻は威圧感がある。そもそも「鼻が長い」ではなく「高い」という表現に、山や身分に対するのと同じ肯定的なニュアンスがある、という国語学者の指摘もある。一方で「鼻高」は、気取った、傲慢な言動をあらわすことばとして、平安時代から存在していた。憧れとともに、どこか近寄りがたい、怖いイメージ。天狗の高い鼻も、「平たい顔族」の「鼻」に対する畏怖がこめられているのだろう。

ただ、よく知られた赤い顔に高い鼻の天狗面は、室町時代に入って成立したものである。鎌倉時代の天狗像はトビを擬人化した姿で描かれるのが普通で、能面

になって大きな鼻の天狗像が定着したようだ。もとはトビのくちばしを表現した鼻が、誇張され、やや滑稽に造型されたものと思われる。館蔵の面や絵馬のように、鼻高の天狗を大天狗、鳥類型を大天狗に仕える鳥天狗と位置付けたのは、江戸時代に入ってからだろう。

◆◆◆鼻高の異形◆◆◆

しかし、じつは「鼻高の異形」の造型じたいは、古くから存在していた。福井県の「王の舞」が有名だが、日本各地に鼻高の異形が祭礼行列を先導する芸能が伝わっている。こうした異形たちは、記紀神話の猿田彦であるとも説明される。

猿田彦は、天孫降臨に際し道案内を務めたと語られる神。眼光きらめき、背丈は七尺、鼻の長さ七咫(たて)という異相で、道祖神とも同一視される。咫は親指と人差し指(一説に中指)を広げた長さで、約一八センチというから、七咫は二二六センチ。かなり巨大な鼻である。この神が「王の舞」などの露払いを務める鼻高の異形と結びついて理解され、中世以来の記紀神話解釈のなかで定着したのだ。

芸能を先導する鼻高面の起源はかなり古く、根強い。さかのぼれば、正倉院に

も収蔵される伎楽面の治道(ちどう)に行きつく。ペルシャ人を模したともいうこれらの面を異形とよぶのははばかられるが、芸能における鼻高面が猿田彦を経由し、天狗につながったようである。

◆◆◆天狗の由来◆◆◆

ところで、中国ではもともと「天狗」は文字どおり「天の狗」をあらわし、犬のような大音をたてて落ちる流星(隕石)や、空を飛ぶ犬のような怪物だとされる。また、日蝕を引きおこすとか、子どもに病気をもたらすとかいった伝承もあり、特に雲南地方では天狗除けの護符も多く作られている。日本では、中国の「天狗」から空を飛ぶ性質だけを受容してきたが、「鼻高」の天狗像にも、どこか異国のイメージはつきまといっている。



「伎楽面 治道」(重要文化財)
 東京国立博物館所蔵
 Image: TNM Image Archives

新世紀ミュージアム

伝統文化を保存していくうえで、博物館の果たす役割は大きい。しかし、博物館維持には資金調達や環境整備など、さまざまな困難が伴うこともある。ネパールの伝統音楽を守るため、一個人が中心となって博物館を設置した事例を見る。



音楽博物館の外観。2階が展示エリアになっている(2011年)

熱意を支える博物館

タンカ(チベット仏教の宗教画)の販売を生業とするラム・プラサド・カデルさんは、ネパールの伝統音楽が日に日に失われていることに心を痛め、一九九五年のある日、一念発起して、楽器の収集や音楽芸能の記録に一生を捧げることを決意した。民俗音楽は古く



映画祭の開会式でサンカ(法螺貝)を吹きならすカデルさん(2011年)

ネパールの音楽とその振興を目的とする博物館の活動を世界にむけて発信することを目的として二〇一一年に始まった。昨年、第七回目を迎えた映画祭では、欧米、南アジアの民族音楽学者が制作した番組が二八本上映された。また、映画祭の前日には、消滅に瀕する民族文化の保全に関する国際シンポジウムを開催し、学術交流の場を提供する努力も始めた。

さらに映画祭では、大英図書館が所蔵する一九三〇年代の歴史的な映像を特別上映し、ネパールの豊かな音楽芸能が世界的にも注目されてきたことを紹介してきた。これらの古い映像を使っ

さい過去の遺物ではなく、ネパールの貴重な文化遺産であると伝えることが、伝統音楽の衰退に歯止めをかける唯一の方法だと考え、一九九七年に音楽博物館を立ち上げ、準備期間を経て二〇〇二年にカトマンズ市内のトリプレシュワル・マハーデヴ寺院に間借りする形で開館した。

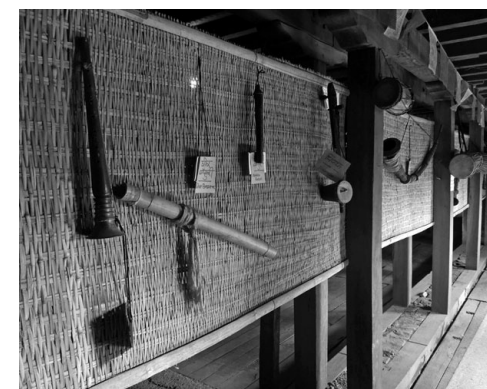
博物館が所蔵する楽器は約六五〇点。カデルさんが自らネパール各地に足を運んで集めたものがほとんどだ。そのうち二〇〇点ほどが常時展示されている。年代が特定できる最古の資料は、二〇〇年前に寺院に寄進されたナガラとよばれる太鼓。そのほかにも、現在では演奏の伝統が途絶えたり、作られていない楽器を数多く集めた。世界の楽器を網羅的に集める欧米や日本の楽器博物館に比べれば規模は小さいが、ネパールの楽器のコレクションでは最大の博物館に成長した。

カデルさんたちは、楽器の収集と並んで、伝承が途絶えてしまった儀礼を再興する試みも始まっている。

厳しい現実を抗して

博物館は公的資金をほとんど受けずに運営しているため、財政的な基盤は弱く、これまでに幾度も窮地に立たされてきた。私財を投じて博物館を運営するカデルさんの意気に惚れ込んだ友人たちがボランティアとして活動を支えているが、それでも対処しがたい事態は起こりうる。特に、二〇一五年四月にネパールを襲った大地震は、歴史的建造物に大きな打撃を与えた。音楽博物館が間借りしている建物は倒壊を免れたものの、大掛かりな補強と改修が必要となり、一度の入場者数を二〇人に制限せざるをえなくなった。年間二万五〇〇〇人あった来館者は、今では五〇〇〇人ほどに減少しており入場料収入も激減した。

さらに追い討ちをかけるように、建物の一角を借りていた寺院の管理組織(グティ)が、地震による被害を機に、二〇一六年にある大学と三五年間の土地の賃借契約を結んだ。大学は寺院を囲む四周の建物を再建して、あらたに校舎とする計画を立てており、博物館は早急に転居先を見つけなければなら



壁面に楽器をつるすだけの簡素な展示方法。キャプションも楽器の名前だけである(2012年)

行して、音楽芸能の映像記録にも積極的に取り組んできた。家庭用のビデオカメラで撮影した映像は三万時間におよぶ膨大な資料となった。そのなかにはすでに伝承が途絶えた音楽や儀礼も含まれている。収集映像のほとんどがアナログ映像であるため、デジタル化を進めたいが、外部資金に依存しているため一割ほどしか達成していない。

音楽映画祭

この博物館が母体となって運営している最大のイベントが、毎年一月に開催される「国際民俗音楽映画祭」である。世界各地で制作されている音楽映画をネパールで紹介するとともに、

ない。

そのような窮地に立たされても、カデルさんは前向きである。昨年は、国際伝統音楽学会におけるネパール代表者となり、国際的な音楽研究の場での足場を築いた。また大英図書館との関係を強化し、共同プロジェクトに取り組む計画を立てている。地震があった二〇一五年には映画祭の開催が危ぶまれたが、大奮闘してなんとか実施にこぎつけた。映画祭が掲げてきた「生存のための音楽」というスローガンが、この年ほど切実な響きをもったことはなかっただろう。博物館の生き残りをかけたカデルさんの闘いは続く。



映画祭に招待された子どもたち。彼らが伝統音楽の将来を決める(2012年)



単調な構図が生む豊潤な沃野

南真木人
民博グローバル現象研究部

マナカマナ参詣

中部ネパール・ゴルカ郡の山中約一二〇〇メートルの尾根上に、マナカマナ（心のなかの願望）とよばれる寺がある。人びとは古来、この女神に供物を献じて願をかけ（バツカル）、成就すれば生贄いけにえのヤギやニワトリを捧げて、お礼参りをしてきた。マナカマナ参詣（ダルサン）は、バルタ・ティルタ（断食巡礼）ともよばれ、麓から寺まで徒歩で約三時間のつづら折りの斜面を登る苦行をともなった。わたしも調査村の人と歩いて行ったことがあるが、額に汗して辿り着いた尾根に延びる参道と宿場町は別世界のようにまばゆく映り、女神のご利益もいくばくかと思つたものだ。

ところが、一九九八年、ここに西欧製のロープウェイ（ネパールではケーブルカーとよぶ）が敷設され、ものの一〇分で尾根に上られるようになった。巡礼の苦行は過去のものとなって久しいが、それによって人びとの信心や女神のご利益が減じたという話は聞かない。

感性に委ねられた映像と音響

映画「マナカマナ」は、このロープウェイのなかに固定したカメラが、供犠獣として売られる荷物キヤビンに載せられたヤギを含む、一〇組の乗客（とヤギ）の一〇分間をひたすら写し、それらをつなげた映像で

構成される。前半の上りと後半の下りで、それぞれカメラを上向きと下向きに固定した映像があるので、構図としては四パタンある。だが、何れもロープウェイのなかと窓からの景色が延々と映し出されることに変わりなく、マナ

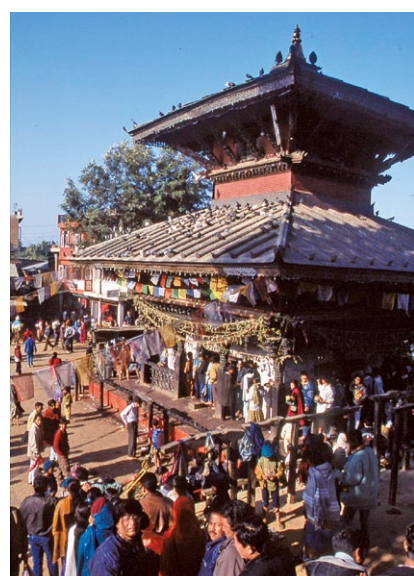


参道で売られている供物と土産物の首飾り（1998年）

カマナ寺が映るわけでもない。初めて乗るロープウェイに表情が強張ったままの無言の祖父と孫、供物を手に固唾をのむ中年女性、気分が高揚し同行者に神話を語る老女、写真を撮りながら、はしゃぐ若者たちなど、一〇組はそれぞれに魅力的だ。唯一、上りと下りの両方に登場する夫婦は、参詣を終えて緊張が和らいだのか、復路は往路よりも少し饒舌じょうぜつになる。大事そうに抱えていたニワトリも、帰りは逆さの縛られた足だけが映り、儀礼が滞りなく終わったことを暗示する。

映画の断片のような家族旅行
（ただし、これはマナカマナではなく、カトマンドゥ盆地外輪山のチャンドラギリ・ヒルズのロープウェイ、2017年）

視聴者の多くは、そうした情景に何らかの意味や作品の意図を探ろうと、乗客の表情と動きを追い、会話に耳をそばだてるだろう。だが、やがてそれは無意味で、作品の意味は視聴者それぞれの胸中や感性に委ねられていることに気づかされていく。そして、それに気づくころには、圧倒的な量で迫る鳥の鳴き声や虫の音の大きさに耳を奪われ、サラノキ林から高度を上げてマツ林に変わる景色や眼下の村のトウモロコシ畑と相まって、ネパールの山の懐深さを感じはじめられる。さらには、乗客のさまざまな反応をおして、そこに暮らす人びとの生活の機微に思いをはせるに違いない。



参拝の順番待ちの列ができるマナカマナ寺（1998年）

感覚民族誌学

乗客役の出演者は何れも、監督の一人で文化人類学者のスプレイが調査する村の人びとや彼女の友人（ツーリスト役の米国人）であり、監督二人もロープウェイに同乗し、カメラ側にいたことが映画の公式プログラムインタビューで明らかになる。それを読むまでは、てっきり無人カメラが写した映像だと思ったが、それほどまでに乗客の態度や表情からは、カメラのレンズやスプレイらの存在を感じさせない。つまり、この作品はフィクションなのだが、台

本が用意されていたようには見えない、素人による意図せざる「演技」がドキュメンタリーを凌ぐほどの現実味を帯びて、視聴者に何かを感じさせ、何かを考えさせる。しかも、その何かとは自由で開かれたものであり、パターン化した衝撃的な構図とは裏腹に、監督の主張や作品の意図を提示することを頑なに拒む。じつはこの作品は、ハーヴァード大学人類学部の「感覚民族誌学ラポ」から生まれたものだ。一言でいえばそれは、ことばによる説明を排除した、感性や感覚に訴えかける実験的な映像と音響のプロジェクトである。鳥の鳴き声、虫の音、ロープウェイのロープが軋む音や鉄塔に差し掛かったときのノイズ、供犠を想起させるヤギの泣き声と寺の鐘の共鳴音など、ここで聞こえる音は、研ぎ澄ました感覚を始めて聞こえてくる類のものだ。映画「マナカマナ」には、感覚民族誌学を名乗る、民族誌映画へのあらたな刺激的な挑戦が凝縮されている。

編集後記

2016年4月1日に施行された障害者差別解消法は、障害を理由とする差別をなくし、人びとの共生する社会の実現を目指している。そのため求められるのが、社会的な障壁を取り除くための「合理的な配慮」である。本号では、その合理的配慮について研究する広瀬浩二郎准教授の共同研究をもとに特集を組んでいる。今回の特集の本文では、この機会をお借りして、ユニバーサルデザインを志向するというUDフォントで試行的に組んでみた。読者諸氏のご意見を賜りたい。

ところで広瀬氏の研究室は、小生の隣の部屋にある。よく出張されているなどは思っていたものの、今回の特集記事のそこかしこに顔を出すのを見るにつけ、これほど精力的に動きまわっていたのかと小生のなまけものぶりを反省した次第である。

今号から「手芸考」が終わり、映像を主題にする「シネ倶楽部M」が始まる。こちらの連載も楽しみにしていきたい。(丹羽典生)

●表紙：視覚障害者と健常者が一緒に、大阪谷町空堀通りを触って歩く「まちあるき」(2014年、撮影：山本清龍)

次号の予告

特集

「お金を数える」(仮)

みんぱくをもっと楽しみたい
人のために—会員制度のご案内

国立民族学博物館友の会

本館展示の無料入館や特別展示の観覧料割引にくわえ、『月刊みんぱく』や会員機関誌『季刊民族学』などの定期刊行物や、毎月の友の会講演会、セミナーなどを通して多様な文化の情報を提供しています。

みんぱくフリーパス

1年間、本館展示へ何度でも無料で入館いただけます(特別展示は観覧料割引)。他にも、みんぱくを楽しむための特典がいっぱいです。

国立民族学博物館キャンパスメンバーズ

みんぱくと大学等教育機関との連携を図り、文化人類学、民族学にふれる学びの場を提供することを目的とした会員制度です。

詳細については、一般財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
(電話06-6877-8893 / 平日9:00 ~ 17:00)

月刊みんぱく 2018年4月号

第42巻第4号通巻第487号 2018年4月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1
電話 06-6876-2151

発行人 園田直子
編集委員 丹羽典生(編集長) 寺村裕史 三島禎子
南真木人 山中由里子 吉岡乾

デザイン 宮谷一 長岡綾子
制作・協力 一般財団法人千里文化財団
印刷 能登印刷株式会社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。
*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「万博記念公園駅(エキスポシティ前)」日本庭園前下車、徒歩約13分。
- 乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通ください。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてできます。

みんぱくホームページ

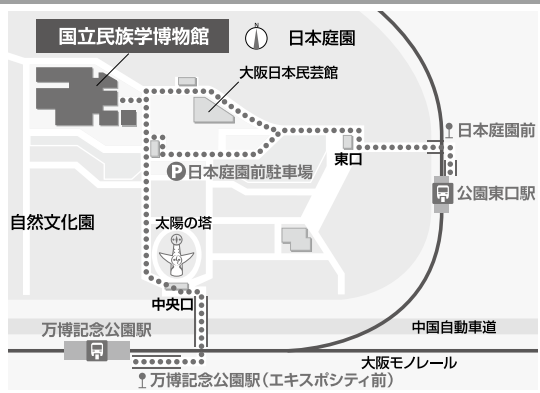
<http://www.minpaku.ac.jp/>

みんぱくフェイスブック

<https://www.facebook.com/MINPAKU.official/>

みんぱくツイッター

<https://twitter.com/MINPAKUofficial>



祖母はよそ者?

What's in a name?

かわい ひろなお 民博 グローバル現象研究部
河合 洋尚

昨年、久しぶりに中国広東省のフィールドに行き、ある家庭を訪問したとき、祖母が孫への怒りを口にしていた。もうあの子はうちの孫ではない、とばかりの憤慨ぶりであった。その理由を聞いてみると、彼らの方言である潮州語で孫が祖母のことを「外婆」(おばあちゃん)と呼んだのが問題であつたらしい。この祖母は、孫からすると母親の母にあたる。中国語を解する人ならば、なぜ祖母が怒っているのか理解に苦しむであろう。しかし、その背景には、中国の方言をめぐる複雑な状況が関係している。中国は多民族国家である。五六の民族のうちマジョリティであるのが漢族であるが、一〇億人を超える漢族は、文化・言語面での多様性が大きい。例えば、北方をベースとする中国語と、南方の方言である広東語、客家語、潮州語とは、コミュニケーションすら成り立たない。みな漢字を使うとはいえ、方言にはそれぞれ独自の漢字表記が一部あつたり、漢字では表記できないことがあつたりする。さらには、親族呼称の範囲すら異なっている。

祖母の怒りの原因となった、「外婆」という呼称は、中国語の文脈では何の問題もない。ところが、潮州語で「外婆」と呼ぶと、「外」という漢字にあるように、「よそ者」というニュアンスが強調されてしまう。だから、祖母は、同じ家族の一員ではない「よそ者」であると孫から言われたらと思ひ、怒りを露わにしたのである。

ここで、祖母は中国語の「外婆」という単語を知らなかったのかと思う読者もおられるかもしれない。しかし、中国の南部では中国語をほとんど解さない高齢者も少なくない。他方で、若い孫の世代になると、方言を解するものの、学校やテレビの影響で中国語が日常会話のベースとなることもある。このように、得意とする使用言語が異なるため、孫は、中国語の表現を基盤として、方言で話すこともあつたりする。そのとき、中国語と方言の意味のズレにより、行き違いが生じるという状況が生まれるのだ。

結局、この問題は、母親が仲介をし、中国語の意味を祖母に教えることで解決した。しかし、祖母は、「外婆」と呼ばれることにはかなりの抵抗感があるらしい。だから、その後は、祖母を潮州語で「嫲嫲」と呼ぶことが、この家庭の暗黙のルールとなった。このささやかなトラブルは、ジェネレーションギャップの問題だけで言いあらわすことができない。現代中国の内部における異文化(言語)衝突の片鱗を、ここに見てとることができる。

みんなのほくぶつかん みんなぱく

MINPAKU

友の会会員制度がさらに充実。 みんなぱくをもっと身近に!

— 国立民族学博物館友の会よりご案内 —

2018年
4月1日
スタート

「正会員」は同伴者 1名が無料になります!

「正会員」の同伴者は1名に限り、
下記サービスが適用になります。

- ・本館展示の無料入館
- ・特別展の観覧料割引
- ・友の会主催の催しへの参加

「ミュージアム会員」 スタート!

博物館を繰り返し利用したい方、
展示の背景やフィールドワークの情
報を知りたい方におすすめです。

- ・本館展示の無料入館
- ・特別展の観覧料割引
- ・『月刊みんなぱく』のお届けなど

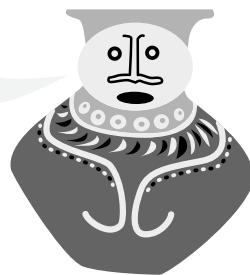
割引提携館が 増えました!

会員証を提示すると割引料金で
見学できます。提携施設 10 館に
下記 3 館が仲間に加わります。

- ・サントリー美術館
- ・竹中大工道具館
- ・MIHO MUSEUM

会員になるとどんなことができるの?

本館展示の無料入館、特別展の観覧料割引、刊行物の送付(『季刊民族学』『月刊みんなぱく』『友の会ニュース』)、催しの優遇枠適用、提携館での割引のほか、研究者が同行する研修旅行など、会員対象のプログラムもあります。種別によって、ご利用内容が異なります。詳細をご希望の方には入会案内をお送りしますので、お気軽にお問い合わせください。



さまざまな会員種別があります (会員構成と年会費)

維持会員	一口	100,000円
正会員	おひとり	13,000円
ミュージアム会員	おひとり	5,000円
みんなぱくフリーパス	おひとり	3,000円
キャンパスメンバーズ	学校・学部等でご入会いただけます。	

入会方法

国立民族学博物館内「友の会カウンター」
ほか、郵便振込で受け付けています。

お申し込み、お問い合わせ

国立民族学博物館友の会
(一般財団法人千里文化財団内)

〒565-8511 吹田市千里万博公園10-1
TEL: 06-6877-8893 FAX: 06-6878-3716

HP: https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/